

ブータン文化におけるあそび歌「ツァンモ*tsangmo*」の位置づけ

— ジグミ・ドゥツパ氏へのインタビューをてがかりに —

Positioning of playful singing dialogues “*tsangmo*” in Bhutan:

In reference to the interview of Jigme Drukpa.

黒田清子

Kiyoko KURODA

1. はじめに

これまでブータン王国の文化、特にあそび歌「ツァンモ*tsangmo*」の実態について調査・報告をおこなってきた。西ブータンのパロ (Paro), 古都プナカ (Punakha), 中央ブータンのトンサ (Trongsa), 東ブータンのタシガン (Trashigang) というように、ブータンの東西を結ぶ街道を西から東へツァンモの存在の有無や状況を把握するため調査を行ってきた [伊野・黒田2014], [伊野ほか2014], [伊野ほか2015], [権藤ほか2015]。その結果、ツァンモはブータン各地に広く伝承されていることがわかってきた。ツァンモは、国語であるゾンカ (Dzongkha) で歌われる一方、各地の方言でも歌われていた。共通する旋律がある一方、地域特有の旋律も確認された。さらに東部ブータン山間部のメラ村 (Merak) においては、ツァンモではなくカプシュー (*khapshe*) とよばれる類似のあそび歌の存在を確認し、報告を行った。

ツァンモとは、6音節4行詩の全24音節から成る詩が、一定の旋律にのせて歌われる。

Choe ni kha sha dra dum

あなたは木綿の端切れ

Nga ni goe chen dra dum

私はシルクの端切れ

Nyam chi tsem go sam pa

一緒に縫いたいけど

Ja ja daw ra ma thong

あまり合いません

(意味：あなたと私は違って、一緒に縫うことができません。縁が合いません。)

歌詞は決まった言い回しがある一方、即興的につくることもある。歌によって2組もしくは2グループで対決をしたり (ツァンモ・ツェニ*tsangmo cheni*)、互いの相性を占ったりする (ツァンモ・モタプニ*tsangmo motapni*) あそび歌である。これまでの調査によると、ツァンモは法要や正月など人々が集まった時に行われたり、村対村など対決の形で行われてきた。特に、年に2、3カ月間、牛や羊などの放牧に出かけた子どもたちが夜集まってツァンモで遊んだり、とうもろこし

の皮むきなどの作業の際、眠くならないようにツァンモを歌ったという。しかし、ここ20、30年の生活形態の急速な変化によりツァンモは歌われなくなっている。一方で、ツァンモがブータン「伝統」文化であることも認識されており、学校教育やラジオ番組の中でツァンモが取り入れられつつある状況も確認し、報告してきた。

ジグミ・ドゥツパ氏 (Jigme Drukpa) は、ブータンを代表する音楽家、音楽教育者である。歌手、ダムニャン (dramnyan 弦楽器)、リン (lingm 縦笛) 奏者として活躍するだけでなく、王立芸術舞踊学校 (RAPA) の元副校長であった。最近では日本メディアへの出演や大学において特別講演を行うなど国際的にも活躍している。2011年ジグミ氏と初めて会い、ブータン音楽についていろいろと話を伺った。その際、彼が主催するAa-Yang音楽学校の2クラス・システムには、その底流に仏教真理があること (ブータン音楽と外国音楽、伝統と現代、自文化を知るべきなのは他文化のためである)、ブータンには金はないが知恵があるなどの話を伺った [黒田2012]。また、彼は現在のブータン、首都ティンパーにおける急速な生活変化と文化変化、特にインターネットやスマートフォンを使いこなすIT世代の変化を懸念していた。昨年、東部ブータン山間部メラ村で調査をしていた折、ある朝、隣りの家の方から男性の低い歌声とダムニャンの音色が聴こえた。行ってみるとジグミ氏が村の老人たちに歌を歌っていた。偶然の再会であった。地方の老人たちは音楽を聴く機会がないので自分が演奏をしてまわっているのだという。ブータンを代表する国際的音楽家が、メラ村というトレッキングが必要なインドとの国境地帯に位置する東の果てにいた。我々が登山装備で過ごす中、ジグミ氏はスニーカーにかばん一つで立っていた。今

年、2015年9月22日にティンパーのホテルにて改めてジグミ氏へツァンモについてインタビューを行った^{註1}。本稿は、ジグミ・ドゥツパ氏へのインタビューをてがかりに、ブータン文化におけるツァンモの位置づけを考察するものである。同時にブータン文化の特徴も伺い知ることができた。

2. チベットからきたツァンモ

ジグミ氏の話によると、ツァンモは元々チベットのものだという。ダライ・ラマ6世 (ツァンヤン・ギャツォ Cangyang Gyaco しかしこの時はSamtang Jamtshoと言われた) の物語がよく知られている。6世は僧侶の生活をやめて還俗し、お酒を飲んで女性と遊んで、たくさんのツァンモを伝えた。ツァンモは、ここから出てきたと皆信じているのだという。

昔のツァンモは仏教語ツェキ (チョケとも Chöke, Choekey) で歌われていた。1959年までのブータンの状況は、ビジネスの相手はすべてチベットであった。また、チベットの高僧がブータンの寺へ教えに来るなどチベットとの交流が深かった。現在のブータンの都市ハ、パロ、ティンパー、ウォンディポダン、ガサ、ブムタン、ルンツェはそれぞれ北上してチベットと交通していた。現在は法律があり行き来はできないが、かつてはチベットとの交流がさかんであった。ツァンモ、ヴェードラ (Boedra チベットの影響をうけた民俗歌) は今現在も双方に同じものがみられる、ただしジュンドラ (Zhungdra ゆっくりシラビックに歌われる民俗歌) は別だという。当時はブータン、ネパール、ラダックでラサの言葉ツェキがリング・フランカ (共通語) として話されていた。おおよそ300-400年前、当時ダライ・ラマはチベットで一番偉大で重要な人物だった。

現在、西ブータンのパロと東ブータンのメ

ラではツァンモのメロディは少し違うが、元は1つのメロディであったと考えられる。ツァンモがブータンに伝わってから自分たちの言葉になるとメロディも徐々にローカライズされていったと考えられる。また、ツェキでのツァンモは、メラの言葉やメロディのものが近いかもしれない。メラの人々はブロッパ (Brokpa) と呼ばれる放牧を生業とする牧畜民である。言語はチベット・ビルマ語族のブロッパケ (Brokpake) であり、ブータンのゾンカ語よりも隣接するインド・アルナーチャル・プラデーシュ州のモンパ (Monpa) の言語と共通する。また、ブロッパの祖先がチベットから移住してきたことをうかがわせるアマ・ジョモ (Ama Jomo) 伝説の伝承をもつ。ブロッパに関する報告は少ないが、彼等の文化がブータンよりもチベットやモンパの人々に近いことは推測できる。現在でも、メラ・サクテンは、ダライ・ラマを信奉しており、ゲルク派もここだけである。そのためメラでは、ダライ・ラマの写真を飾る家が多い。ブータンの他の県ではみられない。このことは今もチベット文化が流入していると考えられる。今のメラ・サクテンの言葉は、かつてのチベットの昔の小さな村の言葉、方言のような扱いだといわれる。ただし、これら言語・文化の相関関係についてはチベットのラサヤラダックの調査により、わかってくるかもしれない。

ジグミ氏は、自分は古老から聞いた話しか知らないと前置きし、ダライ・ラマ6世から流れてきたツァンモについて話した。ダライ・ラマ6世が亡くなる直前、シャディ・ドゥンカル (「白い鶴」の意味をもつ) のツァンモを歌った。この詩はチベットとブータンどちらでも知られており、どちらのメロディでも歌うことができるものである。実際ジグミ氏は2つの旋律パターンで歌ってくれた。

最近リクサル (Rigsar 新しい歌) にもなっているという。

Ja di throng throng karmo

Shok tsel nga la yard a

Tharing jang la midro

Yitang kore ney lo tong

(二つの羽を私にください、鶴に羽根を借り、リタン村にもどってくる、そこで生まれ変わる)^{注2}

ダライ・ラマ6世は僧侶をやめた、ヒマラヤの人々はそう考えている。仏教の世界から世俗の世界の遊び人、普通の人に還俗し遊んだ。女性をほめるときも歌い、けんかをするときも、相手を侮辱することも歌になっていった。しかし、ツァンモの歌詞は、上辺だけ、表面だけをみると普通の生活の言葉だけれども、実はそこには仏教的な深い意味がある。6世は考えた、仏教・僧侶の世界のことだけでは面白くない、普通の人々は難しいことには興味をもたない。6世が、皆がわかるように (心からは理解していないかもしれないけれど)、「普通の人のふりをして」酒を飲んで女性と遊びながら、歌うことでツァンモが広まった。その結果、人々が仏教を理解し、広がっていった。

3. ツァンモとゾンカ語

このように、チベット僧がツァンモを広めた。チベット仏教の中でゲルク派は結婚できない。ダライ・ラマ6世はそれをやめて (女性とも交流し) 仏教が広まっていった。そして、言葉もツェキから地元語と混淆していった。ブータンでは、ハでも東でもツェキを知っている。ジュンドラ、ジェン (zhem女性の歌踊り) には今もツェキがある。特にジュンドラは今でもツェキである。ンガngaという

サンスクリット語とリンガ・フランカであるツェキと地元の言語が混淆している。現在、ブータンの国語・標準語はゾンカ語だが、1960年までゾンカはゾン（城塞）の中で、僧侶たちが使用する言葉だった。1960年からゾンカが国語になり誰もが使う決まりになった。皆がゾンカを話すようになり、ツァンモもゾンカになっていったと考えられる。

昔チベットとブータンの言葉は、30文字一緒であった。しかし、ブータンはチベットとは違う言葉をつくりだした。デェマン・ツェマン (Demang Tsemang 8世紀、高僧 Padmasambhava が2度目のブータン来訪の際通訳として随行した人物) が、ブータン文字ツイ・ズイの2種ある、ゾンカをつくった。チベットは大文字だけ、そこに小文字をつくり加えた。ツェマンのつくったゾンカ文字は、ブータン人にはわかるが、チベット人には読めない。それに伴いブータンのツァンモは、チベット人にはわからなくなっていった。逆にチベットのツァンモ80%くらいは、ブータン人には理解できるという。このことは言語に限らず、ブータン文化の特徴も示している。ブータンにある、いろいろな文化はチベットの方が古いが、チベットと自分たちとは違うという気持ちがある。そのようなブータン、チベットそれぞれの文化の志向の相違を表したことわざが各地で知られている。

チベット人は、金持ちになるほどビジネスをする

インド人は、金持ちになるほど金を（鼻や足に）つける

ブータン人は、金持ちになるほど家をつくって土地を守る

現にブータンの首都ティンプーのホテルや

会社、店舗のオーナーはチベット人であることが多い。ビジネスが苦手なブータン人は今勉強中なのだという。そして、金を取り扱う店はインド人が多い。ブータン人の家はとても大きく、住文化を重要視している。ゾンカで歌われるようになり、ツァンモの意味をブータン人はわかるが、チベット人はわからなくなっていった。言語は文化、アイデンティティそのものとなることもある。ブータンがつくったゾンカをチベット人はわからない。チベットのをブータン人はわかる、しかし、ブータンのものをチベット人はわからないといったところにブータンのアイデンティティは求められている。ほかにも、ブータンの男性民族衣装ゴghoをチベット人は着られない、しかし、チベットの男性民族衣装チュバchubaをブータン人は着られる。これらのことは、ブータン文化が他地域へ流れていかないように、もしくは他地域の文化に同化してしまわないように、自文化を守るためのブータンの知恵であるという。かつてジグミ氏から伺った「ブータンには金はないが知恵がある」といった言葉が思い出される。

このようにブータン文化をチベット人は全然知らない。ツァンモについても、チベットのラサやラダックへいけばもっとわかるかもしれない。今後さらなる調査が必要である。

4. あそびの中にある真理

ブータンのツァンモは、歌によって2組もしくは2グループで対決をしたり（ツァンモ・ツェニ*tsangmo cheni*）や、互いの相性を占ったりする（ツァンモ・モタプ*tsangmo motapni*）など、いろいろな遊び方がある。どのように対話形式になっていたのかについてはジグミ氏に話していただいた。これについては研究がないからわからないが、ツァンモは、その綴り方が二つある。そのため、ツェ

ンモの源流も二つあると考えることができる。一つはこれまで話したチベットのU-Tsang村（もしくは地区）のTsangを指す。この村はダライ・ラマの出身地であり、そこで最初に遊んだということである。しかし、そこで占いをやっていたかはわからない。もう一つのつづりはブータンのもので、ツァン（tsang）は「小枝」、モ（mo）は「占う」を示し、ツァンモは「小枝で占うこと」を意味する。こちらのツァンモは、チベットのツァンモがブータンにきてから占いなどのかたちで遊ぶようになったのかもしれない。^{註3}

Gom ba lamey zhel rey

Yid la dren jung mindu

Magom jam pei zhel rey

Yidla yang yang dren jung

（瞑想しても女性のことばかり、自分の好きなきれいな女の人、高僧のことを瞑想しても頭に浮かんでこない、好きな人のことは考えなくても浮かんでくる）

ある僧侶が、瞑想している。何回も自分が尊敬する高僧のことを考える。高僧が頭の中に出てきてほしいがなかなか現れない。しかし、自分の好きなきれいな女性のことは考えなくてもどんどんでてくる。これが普通の人の考えなのだという。ツァンモであそぶというのは、外側の上辺の部分である。ツァンモの中身、意味内容は深い。一番大切なこと、やるべきことを普通の人は注意してもなかなかそれをするとはできない、逆にいらぬことはやってしまうし、それは簡単にできてしまう。ジグミ氏は、「必要なことをやるのは大変だが、意味のないことをやるのは簡単だ」と、遊びの中に実は深い意味があることを教えてくれた。さらに、これらはすべて供物であるという。歌も演奏も供物であり、一

つのツァンモも供物になるという考えがある。

たくさんあるチャバ（供物）の中でもルイ・チャバ「lue chopa 歌の供物」が一番よいとされている。ルイ・チャバは、体にもいいので、一番の飾りものとなる。心（mind）にもいい。自分自身の歌で悟りをひらくこともできるという。そのため歌や踊りのうまい人物は、僧侶と同じように尊敬されてきた。ミラレパ（Mi-la-ras-pa、チベットで最も有名な修行者・聖者・宗教詩人、カギユ派の宗祖）が歌って演奏してまわったのと同様に、ツァンモはひとつの供物なのである。

5. 変化するブータン、ツァンモの新たな伝承

Chhoepai ngandu goentarze

wong sa mashen ju sa metshey

（どこから来たのかわからなければ、どこへいくかもわからない）

近年、ブータンにさまざまな外国文化が入ってきている。ティンプーの建物もどんどん高層化している。ツァンモも昔どおり村で歌われる場合には、皆がその歌詞の源流は高僧がつくったと知っているから「自分は」「私は」という言葉を使わなかった。さらに、ツァンモが供物でもあると理解しているから、歌った代価がないことも理解している。ところが、他の文化についても最近はどんどん「お金」になっていっている。2001年、ブータンにもコピーライトの会社が設立され、ビジネスを始めた。水すら買って飲まなきゃいけない状況になっている。

ジグミ氏は、このような変化について、「夏は夏です、冬は冬です」という。つまり、季節観や他の環境は変わっていない、変わったのは人、人の考え方なのだという。

現在、学校教育やラジオ放送の番組にツァンモが取り入れられつつあることについてジグミ氏に伺った。昔の生活に基づいた考え方、ツァンモのあり方とは少し異なっているが、学校の授業に入って皆がツァンモを歌うようになるというと考えているという。

昔は村に残り家や地域のために働く子どもが多かった。僧侶になり寺に入ったり、学校へ通う子どもは少なかった。現在学校へ通う子どもが増えている。そこで問題なのは、政府が教育内容よりも経済のことだけを考えていることだという。昔、学校の先生はインドからきた。ブータン人の先生はゾンカ語の授業だけだったという。外国人の先生から勉強を習う事が多かった。ブータンの学校教育の特徴である。

村に残って暮らす子どもたちは、牛馬を放牧し、水くみをしたり、薪集めをしたりしながら、祖父母世代からいろいろな、ブータンの文化を教わった。

今、学校で教えることは5年ごとのプランで決められている。目的が経済の事だけになりつつある。もっと大切なのは、5年後でなく自分の人生をどういうふうにおえるかを考えることである。経済よりも人生観、哲学が必要なのだという。

学校教育における問題の一つは、先生の90%がインド人やカナダ人など外国人であることである。数学、科学、ゾンカ語の時間はブータン人の先生だが、ほとんどが外国人の先生である。さらに、授業に使用される言語は、英語とゾンカ語の2クラスシステムが導入され、英語でブータンの歴史を学ぶことで、自文化をもなくしつつある状況にある。現在、昔ながらのブータンの生活を知らずに育ったティンプーの若者たちは、アイデンティティ・クライシスに陥っているといえる。「『伝統』文化の空洞化」が起こっている（高

橋2015)。今の子どもたちがよく口にする夢は、医者になりたい、海外にいきたい、海外で仕事がしたい、ということである。そういった金持ちになることしか考えない子どもが増えた。政府も、道路などのインフラ整備、電話やインターネットなどの通信設備、病院増設といったことにだけお金を出す。「伝統」文化にはお金をかけない。

しかし、生活変化で「伝統」文化がなくなっていくのなら、ツァンモも学校の授業でやらなければ本当になくなってしまふ。ジグミ氏は、ツァンモの意味や歴史などの勉強は学校でやっていく方がいいと考えている。「伝統」文化としてのツァンモ教育の重要性はおそらく今後高まっていくであろう。

ジグミ氏は、常に「どこからきているか知らなければ、どこへいくかもわからない」ことを認識することが大切であるという。まさに哲学の命題である。

学校どうしてツァンモ大会を行う場合には、グループ対抗がいい。ツァンモ・ツェニ（戦い）の勝ち負けは良い返事しているかどうかという点にある。一番いいツァンモは、今の気持ちを歌詞にのせてつくることである。ツァンモをつくるのが心（mind）、頭でつくっていくことが大事である。もう一つ、良いツァンモかどうかの判断基準に観客・聴衆・他の生徒たちの反応がある。それによりそのツァンモが良かったかどうかはよくわかる。その観客の反応によって、もっと頭が良くなり、さらによいツァンモをつくっていくことができるようになる、とジグミ氏は学校でのツァンモのあり方の理想について語ってくれた。実際、学校におけるツァンモ大会では、相手に対して「うまい」返事が歌われると、「フォー」という大歓声が響く。

ラジオ放送でツァンモが取り入れられつつあることについての考えを伺った。昔どおり

に村や家で人々が集まってツァンモを行う場合は対面で行う。日本でツァンモの論考を示した糸永正之もツァンモのことを「交互唱による対面伝達行動」と名付けている。ラジオだと顔は見えず、番組が続くうちに、いつも同じ人が常連となり、特別な人だけが参加するようになる恐れがある。ツァンモは顔が見えるほうがよいし、そこにツァンモの意味もある。ブータンには、昔から「スター」はいない。皆が同じように互いを知っており理解している。だからこそツァンモで遊ぶことができる。このツァンモは「自分がつくった」とは言わなかった。それがブータンの習わしであった。この点をジグミ氏は強調した。古いブータンのジュンドラ、ヴェードラは「私たち」とは言うが「自分は」「私は」とは主張しない。ほかのことで同様のことが見いだせる。おいしい食べ物があれば一緒に食べる。仏教の生きものすべてと一緒にという思想と同じだという。近代西洋世界の「自分」という考えがブータンにも入ってきた。その違いを認識しておかなければならない。

昔は、皆が一つのグループだった。自分たちが歌い、相手たちの顔を見て返事をしていった。誰か一人がツァンモをするようになれば、そのツァンモの意味は、その人にしか、「スター」にしかわからなくなっていく。ラジオというメディアでツァンモをすることは、できる人がいつも参加するようになってしまう。常連やスターが残ると同じくらいラジオではできない人、ツァンモへの参加をやめる人がでてくる。他の歌のジャンルでも同様のことがいえる。ジュンドラ、ヴェードラでも「自分」よりも「皆、わたしたち」を大事にしている。一緒に食べましょう、一緒にとびましょう、一緒に死にましょう。実際、ツァンモの歌詞内容を分析したときに、「分け合いましょう」という歌詞が多くみられた。

Den chu ka go la du zhi

小さい四角の座布団

Doen na rang ya la mi shong

自分が座っても足りない

Ga na choe ya lo sho

座りたかったら来て下さい

Choe da la nga doe gey

一緒に座りましょう

生きものすべてが悟りを開き、幸せになるように祈る。ジグミ氏はツァンモには、こういった考えが底流にながれているのだという。ダライ・ラマ6世が広めたツァンモは、マハーヤナブディズム（大乘仏教）につながっているのである。

6. おわりに

今回、ジグミ氏へのインタビューによってツァンモに関するさまざまなことがわかってきた。

- ① ツァンモにはチベットのU-TsangのツァンTsangと、ブータンのツァン(tsang枝)、モ(mo占う)という二つの源流があると考えられている。
- ② ツェンモは、ダライ・ラマ6世という具体名が出されたように、チベットから伝えられた文化であると考えられる(人々は信じている)。
- ③ ブータンでのツァンモがゾンカで歌われるようになり、チベット人には理解できなくなった。ブータン・チベットのツァンモ文化が分断された。
- ④③の分断は、ブータンのいわば戦略であったといえる。「ブータンはチベットのことをわかる、チベットはブータンのことわからない」ようにしたのはブータンの自文化を守るための知恵である。ツァンモ以外にもその

ようなブータン文化の特徴がみられた。

- ⑤ツァンモの歌詞には、上辺の表面上の生活文化や恋愛表現を歌っているのと同時に、仏教真理に基づいた深い真理がこめられている (と考えられる)。
- ⑥⑤は、ダライ・ラマ6世が広めたこと、マハーヤナブディズムの考えの影響がうかがえる。

このように、今回のインタビューにより、ツァンモに関する多くのことがわかってきた。また、これまで疑問であった点、ツァンモの多くがゾンカで歌われている理由が少し解明できてきた。一般に、民俗の生活文化の中で歌われる歌はそれぞれの地域・民族の母語であったり、方言であったりすることが多い。ブータンのツァンモはほとんどの地域においてゾンカで歌われていた。これを日本で例えるなら、各地域の民謡が標準日本語 (山の手言葉) で歌われているようなもので、とても不思議に感じていた。しかし、疑問も残る。ゾンカのツァンモがブータン西部から東部へ伝わっていったのか、それともチベット文化に近いメラなどの東部から西部へ伝わっていったのかということである。もしくはそれぞれの地域で同時多発的に歌われるようになっていったという可能性もある。少しずつではあるが、ツァンモの実態、歴史的背景、地理的拡がりが見えてきた。ジグミ氏が言う「どこからきたのかわからなければ、どこへ行くのかもわからない」のであれば、少し過去の状況を知る民俗学的手法が大切だと言える。チベットのラサ、ラダックといった地理的拡がりも含めて今後も調査研

究をつづけていきたい。

注1: この時のインタビュー参加者は、伊野義博、加藤富美子、権藤敦子、山本幸正である。ペマ・ウォンチュクが通訳をした。

注2: 今枝由郎訳では、モンゴル護衛団に捉えられる前にダライ・ラマ6世が辞世の歌を詠んだことが示されている。「ああ白鳥よ心あらば、我に翼を貸せよかし、遠くに飛ぶにあらずして、理塘を巡りて帰り来ん」と白鳥である。理塘、リタンはダライ・ラマ7世誕生の地である。(今枝 2007:86-87)

注3: 今枝は、東ブータンの夜這いの風習にツァンモ (ツォンマ) の相聞歌としての形式が大きな役割を果たしたとし、糸永論文を紹介している。(今枝 2007:107-111)

文献

今枝由郎 訳・ツァンヤン・ギヤムツォ著 2007『ダライ・ラマ六世 恋愛彷徨詩集』トランスビュー
糸永正之 1986「ブータンの「相聞歌」—交互唱による対面伝達行動の予備的研究—」『学習院大学東洋文化研究所研究報告』No.21 学習院大学
伊野義博 2012「ブータン歌謡ツァンモ—掛け合いと占いの諸相—」『民俗音楽研究』第37号 日本民俗音楽学会 pp. 1-12

伊野義博・黒田清子 2014「ブータンのツァンモ、掛け合いと占いの諸相—プナカにおける調査から—」『民俗音楽研究』第39号 日本民俗音楽学会 pp. 37-48

伊野義博・尾見敦子・黒田清子・権藤敦子・山本幸正・Tshewang Tashi・Pema Wangchuk 2014「ブータン歌謡ツァンモの実際: トンサ県ツァンカ村とタンシジ村の場合」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編7 (1)』新潟大学教育学部 pp. 81-99

伊野義博、黒田清子、権藤敦子、ペマ・ウォンチュク 2015「ブータンのあそび歌 ツァンモとカプシュー—トンサとタシガンにおける調査から—」『民俗音楽研究』第40号 日本民俗音楽学会 pp. 1-12

黒田清子 2012「ブータンの国民総幸福 (gross national happiness) と自文化観」『金城学院大学論集 社会科学編8 (2)』金城学院大学 pp. 19-37

- 権藤敦子, 伊野義博, 黒田清子, Pema Wangchuk
 2015「歌唱における学習過程の再考—ブータン
 歌謡ツァンモの調査をてがかりに—」『初等教
 育カリキュラム研究 第3号』広島大学大学院
 教育学研究科初等カリキュラム開発講座 2015
 pp. 23-35
- 諏訪哲郎 1982「基礎語彙から見たブータンの諸言
 語」『学習院大学文学部 研究年報28』安田元久
 編 学習院大学文学部 pp.187-257
- 高橋洋 2015「映像作品にみるブータン農村部の教
 育事情とこれからの課題」2015年10月24日
 早稲田大学にて開催された早稲田大学教育・総
 合科学学術院教育会主催の第3回ブータン教育
 講座「ブータンにおける学校教育の将来を探る」
 配布資料
- 中尾佐助 1959『秘境ブータン』毎日新聞社
- Janet Herman, Kheng Sonam Dorji. *Masters of
 Bhutanese Traditional Music Volume One*,
 Thimphu: Music of Bhutan Research Center 2010
- Kinga, Sonam. 2001 "The attributes and values of folk
 and popular songs." *Journal of Bhutan Studies* 3.1 :
 pp.132-170.

本研究はJSPS科研費26301043の助成を受けたも
 のです。